スウェーデン便り（17）　　橋本白道（陶芸家）

［発行日］＝2000 年 4 月 11 日

［本文］

ヨックモックの街の一角にある市場をのぞくと、さすがにラップランド特有の物がある。トナカイの肉屋がある。毛皮や角、骨なども素材のまま売っている。もちろん加工した物を売る店はたくさんある。

毛皮で出来た長靴やズボン、ジャンパーなど欲しい物がいっぱいある。竹細工のかごも、しっかりした仕事で美しい。手作りのナイフや白樺（しらかば）の根で作った工芸品など素晴らしいものがたくさんある。

だが、竹製品を除けば、どれも決して安くない。しかも私には既に十分すぎる荷物がある。どうしても手に入れたい物は、ジャンベと呼ぶアフリカの太鼓に張るためのカモシカの皮だけである。それだけは何とかして見つけたい。

歩いていると、あちこちで現地のサーメ語でしゃべっている人がいる。サーメ語は地域によって三つに大きく分けられるそうだが、そんな区別は分からない。スウェーデン語でないことが分かるだけで、どちらかというとフィンランド語の抑揚に似ている気がした。

ズラリと並んだ屋台を二周してくまなく探したが、太鼓の皮を見つけられなかった。皮はたくさん売っているのだが、服やバッグなどに使う皮か、床に敷く毛皮である。

街のあちこちに建てられたサーメの移動式テントの一つから、うまそうなにおいと温かそうな湯気がもれている。のぞくと、民族服を着た若い男女が囲炉裏火を囲んで、一杯やっている。トナカイのスープが煮えたっていた。

入っていいかと聞くと、旅行者は入ってはいけないと言う。私は旅行者ではなく、サーメナス・スクールにサーメの文化を学びに来た学生だ、と言うと、一番奥のかなり酔いの回った若者が、入れ入れと手招きしてくれた。

トナカイのスープは、かなり臭みがあるが、まったりとしておいしかった。冷え切った体の隅々まで温めてくれる。スピリッツを飲み、トナカイの肉を食う。意外とあっさりした味だった。

サーメの音楽に興味があり、ストックホルムやヘルシンキで探し回ったと言うと、一人がヨイクを唄（うた）い始めた。周りの者が唱和する。掛け合いの中でジャズのように即興的に変化してゆく。ヨイクは日本の民謡のように限られた人しか唄えないものだろうと、何の根拠もなく思い込んでいた。ところが、目の前に展開されるヨイクの供宴に驚き、そして感動した。

周りの者に勧められて、一人の若者がギターを弾いて唄い出した。美しく悲

しい調べの歌だった。女の子たちも次々と歌を聞かせてくれたが、夜のコンサートに行く時間が迫っていた。

そろそろ行かなくてはと言うと、どこへ行くんだと聞く。コンサートに行くと言うと、俺（おれ）たちの歌の方が良いと言う。確かにそうかもしれない。だが既にチケットを買ってしまった。それでは、日本の歌を唄ってから行けと言う。私は「さよならをするために」を心を込めて唄った。

強い酒と熱いスープと、囲炉裏火と若者たちの歌で、心も体も温まっていた。コンサートなんか行かなくていい、今日はこれで十分という声が、移動式テントの煙出しの向こうの方から聞こえたような気がした。